

# 鷗外漁史の再生

——『玉篋兩浦嶋』執筆の意図——

小倉 齊

1

一九一〇（明治四三）年二月一日発行の『スバル』には、与謝野寛による次のような詩が掲載されている。

新浦島

なんと近頃めづらしいではないか、

二代目の浦島太郎さんが帰つて来たとき。

こんどの太郎さんはよッぽど風変わり。

お茶の水の橋の上で大学生に問ひ掛ける。

「お父はあるか。」

「貴様の老父は日清戦争で死んだよ。」

「さうか。」と太郎さんは軽く笑つて頷いたばかり。

二代目の浦島太郎さんは何処にゐる。  
呑気な太郎さんは早速貸家を探して住んでゐる。  
山の手の崖上の品のよい日本造に。

二代目の浦島太郎さんのお土産は、

一つでない、二つでない、三、四、五、六、七つの玉手箱。

一つの箱には PURUMULA 姫の赤い心臓。

次の箱には「寂静」と云ふ、黄ろい、不老不死の神薬。

又次の箱には NIETZSCHE が形見の若若しい明色の仮面。

四番目の箱には CENTAUR の生血を試験管に入れて、

VITA SEXUALIS と貼札がしてある。

時の内務大臣は此四番目の箱に錠前を掛けさせた。

呑気な太郎さんは黙つて笑つて其箱を棚に上げた。

崖下の棟割長屋にうようよとゐる腕白小僧が  
折々匍上ツて来ては太郎さんの堀の孔を覗く。  
さうして『太郎さんは古いやあい。』と囁す。

太郎さんは葉巻を啣へた儘、五番目の箱の蓋を開ける。

箱からは『小野潤一作』と裏に銘のある円い鏡が出てくる。

太郎さんは美しい鏡に向いて、少し白いのが混つてる髭を剃り出した。

呑気な太郎さんは別れて来た乙姫さんの事なんか少しも思つてやしない。

小倉赴任後（鷗外漁史はこゝに死んだ<sup>(1)</sup>）と宣言した鷗外森林太郎が、長い沈黙時代を経て日露戦争後の文壇に復帰してくる状況が、見事に捉えられた詩である。また、文壇に復帰した鷗外が何をもちたらし、それらがどのように受け止められたかについても、簡潔に、興味深い視点で描かれている。与謝野寛の筆は、時代の若い息吹とかかわりながら意気込んで文学活動を再開していく鷗外の気負いを、見事に感じ取っている。

ところで、この詩の中で与謝野寛が、文壇に復帰した鷗外を（二代目の浦島太郎さん）に見立てたのには、理由があった。一九〇二（明治三五）年三月第一師団軍医部長に補せられ、小倉から東京に帰任し

た鷗外が、伊井蓉峰の求めに応じて書き、同年十二月『歌舞伎』の別冊として発表したのが、戯曲『玉篋兩浦嶋』である。そこには、（浦嶋太郎）の（事業）を（後ノ太郎）が発展的に継承する様が劇の形で描かれていた。しかも、この『玉篋兩浦嶋』は、文壇復帰後の鷗外の本格的創作の第一作でもあった。与謝野寛の見立てがこうした事情を踏まえてなされていることは、まちがいない。我々は、寛の見立ての中に、文壇復帰後の鷗外の活動の質を考える上での示唆的なものを見いだすことができるはずである。

本稿では、『玉篋兩浦嶋』を小倉で一旦死んだ鷗外漁史の再生を宣言する書として捉え、その作品世界を追尋することで、（第二の浦島太郎）として見立てられた文壇復帰後の鷗外が目指したものについて検討したい。

2

『玉篋兩浦嶋』がどのような経緯で書かれたかについては、鷗外自身「玉篋兩浦嶋」がどのような経緯で書かれたかについては、鷗外自身「玉篋兩浦嶋」がどのような経緯で書かれたかについては、鷗外自身身が次のように語っている。

初め伊井の要求は、余にファウストの筋を聞き、座付の作者をして、中幕に仕組ませたいといふのであった。余のいふには、ファウストは二日掛りに演ずる程のもので、中幕に仕組むべき処を抜くことは、殆ど出来ない。それ故何か代りをといふので、浦島を書いた。浦島と決めたのは、ファウストが老人であつて若返るのと、丁度反対に壮年のものが忽ち老翁になるといふ処を考へたのも、一つの原

因になつて居る。

また、鷗外に執筆を依頼した伊井蓉峰は、次のように述べている。<sup>(3)</sup>

今度の兩浦島を鷗外先生に書いて戴くに至つた動機は、川上さんが欧羅巴から帰つて来て、其洋行土産に明治座で沙翁のオセロをするといふ事なので、実は其と張合う心であつたのです。

当時の〈洋行帰りの俳優中には文学者と演劇との關係を密着せしむると云ふの点に重きを置く〉という傾向が強く、ヨーロッパから帰国して間もない川上音二郎も〈正劇〉と銘打つて〈青年文士江見水蔭氏が一千圓の報酬にて脚色脱稿したる〉シェイクスピアの『オセロ』を明治座で上演するという状況であつた。<sup>(4)</sup> こうした川上の動きに対抗する形で『ファウスト』の筋を聞いた伊井が鷗外に執筆を依頼し、ファウストが老年から青年になつて再び世の中に出るといふ趣向から浦島伝説を想起した鷗外は、青年から老人になる代わりに再び青春をその〈事業〉とともに二代目の〈浦島〉によつて回復するという『玉篋兩浦嶼』を執筆したというわけだ。

ゲーテの『ファウスト』第一部には、悪魔メフィストフェレスにアウエルバハの酒場へ連れて行かれ、学生と飲んで騒ぐけれども、すでに五十歳を越えているため十分に楽しめないファウストが、メフィストフェレスとともに魔女のところへ行き、若返りの秘薬を飲んで、二十代の青年に変わる、という変身譚的な話が含まれている。また、第

二部では、日常的な時間や空間を超えた世界が背景となつた場面が多く登場する。こうした要素が、鷗外に浦島伝説を想起させた、ということとは十分考えられる。

しかし、こうした契機は、鷗外自身が述べているとおり、あくまでも〈一つの原因〉でしかない。たとえば、〈承りますと、これは浦島太郎の譚を材料にして、これに先生のお考へを吹込んで、唯今欧羅巴で持離して居るハウプトマンなどの書き方を模したのださうで〉<sup>(5)</sup>とか、〈又近頃独逸で持て離す、ハウプトマンの沈鐘のうちに、ラウテンデラインの涙が玉となるを、水精ニケルマンが「この小さな玉のうちに、世の中のあるとあらゆる愁しみ喜びが籠つて居る、これは涙といふものだ」といつてあるのに、対照して非常に面白く感じました〉<sup>(6)</sup>といった同時代の証言・批評がある。また、〈部分的には、その頃鷗外の本んでいたハウプトマンの「沈鐘」の影響もみられる。たとへば人間ならぬ乙姫が別れのあまりなかなしさに、人間のやうな涙をこぼす、それが真珠の玉になるといふくだり、謡曲の「今浦」にうたはれてゐる鯨人の涙の珠の伝説により所はありながら、やはり「沈鐘」の山の妖女が、人間の情に感じてダイヤモンドの涙をこぼす趣向と關係なくはあるまい〉<sup>(7)</sup>というような、ハウプトマンの『沈鐘』からの影響をはつきりと指摘する声もある。さらには、ハウプトマンからの刺激に加えて、第一に、クラウゼヴィッツの「純抵抗の原則」のうちに限定的放棄、限定的断念の考えが、小倉時代を経ることでゲーテの諦念の思想を鷗外に意識させる素地ときっかけを作るに關与したこと、第二に、王陽明の「知行合一」の説や熊沢蕃山の「事業」に生きる人生態度へ

の関心が深まったこと、を重視する指摘もある。

このように、『玉篋兩浦嶋』執筆の動機、あるいは題材として浦島伝説が選ばれた理由は、必ずしも単純ではない。小倉時代の思想体験をも視野に入れ、鷗外自身の内部に潜む、作品を書かざるを得なかった必然性に目を向ける必要がある。まずは、作品の内容について紹介することから始めたい。

3

『玉篋兩浦嶋』は、「上ノ巻」と「下ノ巻」とから成る。

「上ノ巻」は龍宮城の場である。龍宮城で安逸な日々を送っていた浦島太郎は、ある日思いもかけぬ夢を見る。その内容を語り明かすと、〈乙姫〉は、〈太郎〉の望郷の念が強くなったことを感じ取り、次のように語りかける。

そはおそろしき おんゆめを  
おん身はごらん なされしよな。  
くがに獣と たたかふも、  
うみに波濤と あらそふも、  
そは人間の 命ならん。  
あめかぜしらぬ このくににて  
わらはとともに くらすをば  
おん身はうれしと おぼさぬか。

〈太郎〉の心を龍宮につなぎとめようと必死の〈乙姫〉に対し、〈太郎〉は次のように告げる。

いやとよ。思はぬ 夢といへど、  
まことは日ごろ わがむねに  
つつめることの いつしかに  
こりてゆめとや なりぬらん。  
渴して水を おもふごと  
このとし月の 平和に倦み  
いまは 事業の したはしく  
なりぬるものか、 おぼつかぬ。

もちろん、〈太郎〉の〈乙姫〉に対する愛がさめたというわけではない。しかし、〈太郎〉は二人の本質的な違いを認識した上で、別離を決意するのである。

色も香もある おことを棄て、  
このみやぶを たちさらんは、  
こころぐるしき かざりなれど、  
おことは自然、われは人、  
おことは物の おのづから  
成る をよろこび、われはまた  
ことさらに事を 為さん とすれば、

ふたりのところは 合ひがたし。

人間は自然に対して手を加え、自然以上のものを創り出そうとするが、自然はあくまでも、進歩向上などとは無縁である。自然と人間の相違を認識した〈太郎〉は、〈ことさらに事を為さん〉とするために人の世に帰るのである。

はらはらと涙を流しながら、〈のこるわらはは けふよりは／たれとともにか ものいはん〉と口をつぐむことで別離の苦しさに耐えようとする〈乙姫〉に対し、〈太郎〉も同様の決意を告げる。

われもおことと さざめごとの

かたれどつきぬ それならで、

いまよりのちは 口舌を

事業のあたと おもひつつ

おなじく口をつぐむべし。

けつきよく、〈太郎〉は、先に龍宮へ来た時の服装に戻り、釣り竿を受け取って、立ち去ろうとする。それに対し、〈乙姫〉は、自ら流した涙の真珠と化したものを釣瓶に入れ、鏡で蓋をして〈太郎〉に与える。

この不老のゐに いくちとせ

うきしづみせし この鏡の（釣瓶を取る。）

覆せば返らぬ みづにかへ、（水を傾く、口女に。）——  
あの涙の玉と 鏡をこれへ、（口女二重に上り二品を取り渡す。）

なみだとともに（珠を釣瓶に入る。）

心をこめ（息を嘘き込む。）

しつらひなせる たまくしげ、（鏡を蓋に掩ふ。）

これをわが兄に まゐらせん。（錦に包む。夫の方へ向く。）

またあふことの あらんまで。

このはこをゆめ あけたまふな。

〈太郎〉は〈事業〉に生きるため、私的な愛の世界を捨てたのである。その〈事業〉がどのようなものであるかについては、「下ノ巻」で明らかにされる。

「下ノ巻」は、丹後の国与謝の浦筒川村の場である。帰郷した〈太郎〉と、これから外国遠征の途に上ろうとする〈後ノ太郎〉との対話を中心に展開する。怪しい男と見なされた〈太郎〉と〈後ノ太郎〉とが押し問答するうちに、〈乙姫〉からもらった錦がほぐれ、匣の中からたくさんの真珠がこぼれ散り、白雲がたなびくとともに、〈太郎〉は白髪の老人となる。これをきっかけに二人は互いの名前や境遇を明かし、先祖と子孫の関係であることを知る。そこで〈後ノ太郎〉は、次のように述べる。

わが父なりし 浦島らの

とほきえみしを うちしより、  
平安城の みよさかえ、

みつぎするもの 帰化するもの

ひきもきらねど、 もののふの

ころは鑿かず、 ひのものとの

武名をなほも あげんため、

わたつみこえて とほづくにへ

わたらんとこそ おもひ候へ。

年老いた〈太郎〉は、その精神を大いに喜び、〈乙姫〉の涙が変化  
した真珠を〈いくさのたすけ〉に与え、次のように述べる。

事業をわかき わがすゑに

つたへおこなふ ことをうる、

これもひとつの 不老不死。

われはこれより やまふかく

かたちをかくし、 ひとのよの

なりゆくさまを 目守りてん。

けつきよく作品は、〈おもふは先祖〉〈行ふは／子孫にこそあれ〉と、  
〈事業〉を伝えていくことの永続性を訴えつつ、閉じられるのである。

4

この作品について、〈乙姫を「自然」の象徴として、これに恋愛と  
平和の精神を賦与し、浦島太郎を「人間」の象徴として、これに事業  
と戦闘との行為を賦与した〉〈構想の中に鷗外の精神を探ることは決  
して不当ではない〉とする岡崎義恵は、次のような見解を示している。<sup>(9)</sup>

浦島のこの別離は、自然と人間、平和と争闘といふやうな「異類」  
のものの相合し難いことを告げるものであるが、それに伴つて恋愛  
の否定乃至超克といふ思想があらはれて居る。強ひていへば更にそ  
の背後に男と女とが「異類」的な存在であることを示唆するものと  
もいひ得るが、其処までいふのは行き過ぎであるとしても、ともか  
く「異類」を結んで同類とする根本的な力としての愛が否定されて  
ゐることは事実である。

さらに岡崎は、作品のテーマを〈浦島太郎が人間としての事業を自  
己の自分と思ふやうになつて、乙姫との恋愛を棄てるといふ〉ところ  
に見、〈しかしそれによつて自身事業の人として立つ力を失ひ、もは  
や傍看する人として仙郷に類する世界へ隠れざるを得なかつた〉と指  
摘する。<sup>(10)</sup>〈人間的な生の力を喪失し、老衰の世界に入った〉〈浦島太郎  
の中に、〈一脈の寂しき諦念に似たものを伴ひつつ、冷々澹々として  
傍看の山路を歩む〉鷗外の姿を見ようという見解は、なかなか魅力的  
だ。ただし、この作品の中で浦島帰還の動機となる〈事業〉という言

葉については、さらに検討する必要があるはずだ。

この点については、やはり岡崎が、日露戦争の起る前々年の作品であることに注目しつつ〈事業〉を解釈し、〈浦島の出陣といふことは近松の「浦島年代記」に先蹤もあるが、この説話にややふさはしくない構想のやうでもある。しかし日本の通俗的な劇場に上演する為には、この程度も已むを得ないことであつたかも知れない〉とし、〈戦争を取り入れてはゐるが、征服的意図は重要なものではない〉と述べている。また、本間久雄は、この作品には〈軍国主義的雰囲気が濃厚に裏づけられてゐる〉とし、その理由を〈日露戦役の直前につくられたものだから〉と述べながらも、最終的には〈鷗外が軍国主義者であつたか、コスモポリタンであつたかなどは、この場合、敢て問ふべきでない。吾々は、ただ鷗外が、当時の、わが時代思潮の一つであつた国力拡張の立場からの軍国主義的要求の一つを、いち早く把握して、そして、その立場から浦島伝説を解釈し、そして、そこに、作者自身の哲学を加味したところを、鑑賞すればよいのである〉と述べている。<sup>(11)</sup>両者の指摘にあるように、『玉篋兩浦嶋』が時代の空気を反映し、〈大日本膨脹の説話<sup>(13)</sup>〉として享受される可能性があつたことは確かである。しかし鷗外自身は、より広い意味で〈事業〉という言葉を用いたはずである。

以下に挙げるのは、一九〇一（明治三四）年九月ころと推定される母親峰子宛書簡の一節であるが、〈家事（姑に仕へ子を育つるなど）のため何事（文芸など）も出来ぬ〉焦燥を訴えてきた妹小金井喜美子の書簡に触れながら、自身の心境を語っている。

おきみさんの書状を見ることに、何とかして道を学ぶといふことを始められたたと存候。道とは儒教でも仏教でも西洋の哲学でも好けれど、西洋の哲学などは直しき師なき故、儒でも仏でもちと深きところを心得たる人をたづねて聴かれ度候。（中略）少しこの方意見を用ゐられ候はば、人は何のために世にあり、何事をなして好きかといふことを考ふるやうにならるるならん。（中略）道がわかればいはゆる家事が非常に愉快なる、非常に大切なこととなる筈に候。又芸に秀づる人は、譬へば花ばかり咲く草木の如し。松柏などは花は無きに同じ。されど松柏を劣れりとはすべからず候。何でもおのれの目前の地位に処する手段を工夫せねばならぬものに候。

〈道を学ぶ〉ということを通して〈おのれの目前の地位に処する手段を工夫〉する必要性を説いているが、日常の些細な行為・営みの意義を認めようとしている点に注目したい。さらにこの姿勢は、同じく一九〇一（明治三四）年十二月五日の小金井喜美子宛書簡に受け継がれる。この書簡の中で鷗外は、〈近頃井上通泰、熊沢蕃山の伝を校正上本せしを見るに、蕃山の詞に、敬義を以てする時は髪を梳り手を洗ふも善を為す也。然らざる時は九たび諸侯を合すとも徒為のみと有之候。蕃山ほどの大事業ある人にして此言始めて可味なるべしと雖、即是先日申上候道の論を一言にて申候者と存候。朝より暮まで為す事一々大事業と心得るは、即一廉の人物といふものと存候〉と述べ、日常的な行為・行動の積み重ねが〈大事業〉につながっていくとしてい

る。

「フリードリヒ・パウルゼン氏倫理説の梗概」(『福岡県教育会々報』一九〇〇・一二)にも「事業」に言及した興味深い一節がある。

目的主義は一に心力主義と云ふ。心力とはアリストテレスの所謂「エネルギア」に取るなり。この主義は所謂功利説に近きものなり。而るにパウルゼンは功利の名を嫌忌す、是れ善を為す最終目的の上より見解を異にすればなり。功利説は快樂を以て最終の目的となし、パウルゼンは然らず、猶下段を見よ。

善の最終の目的は幸福なり。幸福とは何ぞや。学者或は以て快樂となす。其事業をなすはその快樂の原因たるを以てなり。パウルゼンは之に反して事業(所行)を以て幸福となす、快樂は唯だ之に随伴するのみ。

鷗外が「事業(所行)を以て幸福となす」パウルゼンを肯定的に捉えていることは確かだ。おそらく、小倉時代の鷗外は、「奉職の考ある間だまつて置かるゝところに居るといふ考ならでは」<sup>(14)</sup> いられない閉塞状況の中で、人生における行為・行動の意味について考えざるを得なかつたはずである。その結果、日常の行為・行動を重んじ、その積み重ねとしての「事業」そのものに幸福を見いだすという人生観に到達したのであろう。そして、こうした人生観が、「事業」に生きるために龍宮を捨てる(浦島太郎)として形象化されたのである。

5

『玉篋兩浦嶼』の結末において、「太郎」は次のように語る。

事業じぎよをわかき わがすゑに  
つたへおこなふ ことをうる、  
これもひとつの 不老不死。  
われはこれより やまふかく  
かたちをかくし、ひとのよの  
なりゆくさまを 目守りてん。

『萬年艸』(一九〇二・一二)所収の広告文には、「我裔わがすまに大志たいしを伝つたへ遂とげしむるこれや真まことの不老不死ふろうふし」とあるが、題材としての浦島伝説に見られる不老不死への希求といったテーマを、鷗外は、「事業」の永遠性という形に捉えなおしたわけである。したがって、この作品における「太郎」と「後ノ太郎」との関係は、単なる親と子とか先祖と子孫といったものではない。思想を受け継ぎ実践する存在として「後ノ太郎」は登場しているのだ。「事業」を受け継ぐべき存在があつてこそ、「事業」の永遠性―真の不老不死が保障される。そのとき、はじめて「太郎」は、現実世界の仙郷とも言うべき山奥に身を移し、「寂静」と云ふ、黄ろい、不老不死の神薬(15)を手にも、(ひとのよの)なりゆくさまを)見守ることができるといふのだ。

『玉篋兩浦嶼』を鷗外漁史再生の書として読むとき、この結末はき



わめて暗示的である。一旦死んだ鷗外漁史は、小倉時代の思想体験を経て、日常の行為・行動の積み重ねとしての〈事業〉に意義を認め、その姿勢を實踐する存在(後ノ太郎)として再生する。もちろん、その実践を〈寂靜〉の境地で見守る(太郎)の眼を内に抱えながら。

具体的には、その活動は、歴史的視点・社会的視点に立つて作品を批評する姿勢が頂点に達した「金色夜叉上中下篇合評」(『藝文』一九〇二・八)や、〈小倉時代にはじまった、国のありようを対象化する思想的なひろがり<sup>16)</sup>〉が見られる「新社会合評」(『萬年艸』一九〇二・一二、一九〇三・一二)、さらには、イブセンの『プラン』の一部を翻訳した『牧師』(『萬年艸』一九〇三・六、九)などとなって現れる。

「金色夜叉上中下篇合評」の中で〈隱流〉の名で登場した鷗外は、〈鴨沢宮〉の〈自ら其の色よきを知〉つて、其色を資本として、出来る丈の栄華を贏ち得やうとして居る、その思想の全体〉を〈十九世紀の紀末からこのかたの世間〉の風潮、あるいは〈全世界の現時代の思想〉を〈或る方面から〉代表する〈高利貸的思想〉と見なし、ロルフが『道德論』で人間の生活形式の發展は生活増殖競争の成果であり、その根底には〈不屬廢〉(あくことをしらないこと)という人間の本性があるとしている点を引きながら、〈さうして見ると、ROLPHの哲学は金色夜叉の哲学で、紅葉君の小説は不屬廢の小説だと謂つて好からう〉と評している。また、「新社会合評」では、概して文学作品として評価されなかった矢野龍溪の『新社会』(大日本圖書株式会社、一九〇二・七)を〈實現を将来に期した〉(一)の社会小説(SOCIALER ROMAN)〈(一)の UTOPIA〉とし、作品内に説かれている社会政策や思想を徹

底的に批判している。さらに、『牧師』では、〈まことの功德は 身命を棄ててはじめて 得らるべし〉とか〈身命は 抛つべし。／こころざしをば 棄つべからず〉と述べながら、〈事業〉に邁進して死んでいく主人公を描いている。

このように、歴史的視点・社会的視点からの批評眼や〈事業〉に生きる人間への関心を示しながら、文壇における鷗外漁史の再生はなされていく。そしてそれは、『半日』(『スバル』一九〇九・三)以下の豊饒な創作活動へと展開していくのである。

## 注

- (1) 森林太郎「鷗外漁史とは誰ぞ」(『福岡日日新聞』一九〇〇・一・二)
- (2) 隠流口述「浦島の初度の興行に就て」(『歌舞伎』一九〇三・二)
- (3) 伊井蓉峰「玉匣兩浦島談」(『新小説』一九〇三・二)
- (4) 「川上と正劇」(『都新聞』一九〇三・一・一五)
- (5) 鈴木春浦・島山古瓶「兩浦島に於ける俳優其他の意見―兩浦島の口上」(『歌舞伎』一九〇三・二)
- (6) 上田柳村「兩浦島の脚本評」(『歌舞伎』一九〇三・二)
- (7) 楠山正雄「鷗外の戯曲」(『文藝評論』一九四八・二二)
- (8) 清田文武「森鷗外『玉匣兩浦島』の世界と位相」(『信州白樺』森鷗外特集)一九八一・四)
- (9) 岡崎義憲「鷗外と諦念」(宝文館、一九六九・一二)
- (10) 注(9)に同じ。
- (11) 注(9)に同じ。
- (12) 本間久雄「明治文学 考証・随想」(新樹社、一九六五・九)
- (13) 錦城生「森鷗外氏著劇詩『玉匣兩浦島』を詠む」(『読売新聞』一九〇三・一・一〇)

- (14) 「森峰子宛書簡」(一九〇一・月日不詳)
- (15) 与謝野寛『新浦島』(『スバル』一九一〇・二)
- (16) 磯外英夫『鑑賞日本現代文学① 森鷗外』(角川書店、一九八一・八)